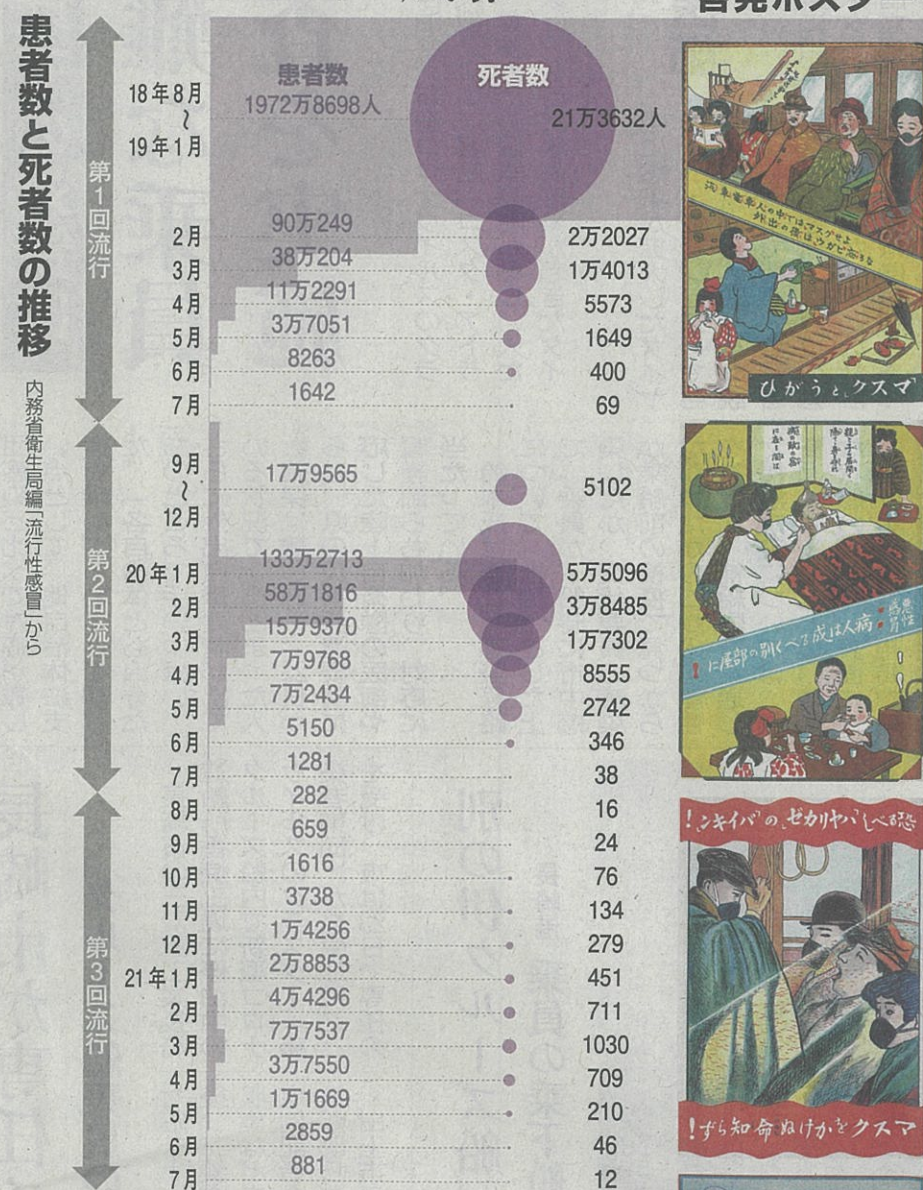


新型コロナ

スペイン風邪に学ぶことは

スペイン風邪

流行したときに作製された
啓発ポスター



スペイン風邪

A型インフルエンザウイルスの世界的な大流行。1918年春に米国と欧州で感染が広がり、20年まで世界中で猛威を振るった。患者数は世界人口の25～30%ともされる。死者数は2千万～4千万人、5千万人との説もある。日本でも流行の波は3度起きた。当時の人口は約5700万人だったが、内務省統計によると患者数は約2380万人、死者は約38万8千人にのぼったとされる。後の研究では死者約48万人の推計もある。

学校では運動会や遠足中止、休校も相次いだ。
《学習院の運動会中止 各官方の御身を気遣ひ》(同27日付)
大阪市内では全小学校や幼稚園が1週間閉鎖され(同年11月5日付)、東京などでも小学校の休校が相次いだ。

《感冒流行各地に防疫官を派遣 内地で目下熾烈なのは愛知、福井、埼玉の各県》(同26日付)
《患者に近寄るな 咳などの飛沫から伝染 今が西班牙風邪の絶頂》(18年10月25日付)

20世紀最悪のパンデミック(感染症の世界的大流行)とされる1918～1919年の「スペイン風邪」(1918～1919年)。死者は、世界全体で2千万～4千万人、国内でも40万人前後が亡くなった。当時の朝日新聞紙面や内務省資料を調べると、感染防止の対策や社会の動揺が、新型コロナウイルスに見舞われている今と、写し絵のように似ている。私たちは1世紀前の悲劇から何を学べるのか。

休校・マスク・外出自粛 変わらぬ対策

「流行性感冒」によれば、政府が呼びかけた対策は、マスク着用▽うがい▽室内の換気や掃除▽患者の隔離など。マスクの材料に、外科用ガーゼは「不完全」との記述もある。
密閉空間の危険性の指摘も現在と一緒だ。大勢が集まる場所への出入りについて、「芝居、寄席、活動写真などには行かぬがよい」「電車などに乗らずに歩く方が安全」と自粛を求めた。

「流行性感冒」によれば、政府が呼びかけた対策は、マスク着用▽うがい▽室内の換気や掃除▽患者の隔離など。マスクの材料に、外科用ガーゼは「不完全」との記述もある。
密閉空間の危険性の指摘も現在と一緒だ。大勢が集まる場所への出入りについて、「芝居、寄席、活動写真などには行かぬがよい」「電車などに乗らずに歩く方が安全」と自粛を求めた。

同年12月25日付の紙面は、日本の患者数が1千万人にのぼったと伝える。内務省衛生局が、スペイン風邪の記録をまとめた「流行性感冒」(平凡社)によると、国内では18年8月～19年7月の最初の大流行の後に、19年9月～20年7月、20年8月～21年7月にも流行期があった。国内の患者数は約2380万人、死者約38万8千人とされる。後の研究で、死者約48万人との推計もある。

クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号を思わせる、船内での集団感染の記事もあった。《航海中に死者続出》(同7日付)として、米国から日本へ向かう船内での感染拡大を伝え、妻子を亡くした男性の様子などを報じている。

正確な情報 住民へ素早い公開が重要

と、飛沫感染に神経をとがらせた。同3日付紙面では、電車内で「手放して咳をする事」の禁止が検討されたことも報じられた。
ワクチン接種も進められた。ただ、インフルエンザがウイルスによって引き起こされることが明らかでなかった当時では、効果は乏しかったようだ。著名人の死も相次ぎ、社会に衝撃を与えた。

18年11月6日付紙面は、劇作家の島村抱月の死去を、多くの紙幅を割いて伝えた。臨終に間に合わなかったことを嘆く、愛人だった人気俳優松井須磨子のコメントなどを掲載した。

医療崩壊の危惧も
新型コロナウイルスの感染拡大で危惧される医療崩壊についても、100年前の紙面は伝えている。
20年1月6日付紙面は《病院は満員お断り》との見出しで、都内の各病院に患者が殺到して入院ベッドが不足していることや、看護師が足りないため、派遣要請の1割にも応じられない状況を詳報した。

100年で科学技術は進展したのに、なぜこれほど変わっていないのか。
スペイン風邪に詳しい国立保健医療科学院の逢見憲一主任研究官(公衆衛生史)は、ワクチンの進歩を除けば「マスクをする、密集は避ける、患者を隔離する」といった感染症対策の取り組みは変わっていないと話す。当時の対策は感染拡大のスピードに対して遅れた面があったようだ。正しい正確な情報を素早く集めて、住民に公開することが重要。今に通じる教訓だと指摘する。

命を落とした主な著名人

- 島村抱月 (劇作家)
- 竹田宮恒久王 (皇族)
- 大山捨松 (女子教育に尽力、大山巖の妻)
- 辰野金吾 (東京駅など手がけた建築家)
- 村山槐多 (画家)
- グスタフ・クリムト (オーストリアの画家)
- エゴン・シーレ (オーストリアの画家)
- ギヨーム・アポリネール (フランスの詩人)
- マックス・ウェーバー (ドイツの社会学者)

(国立保健医療科学院図書館所蔵内務省衛生局編「流行性感冒」から)